

<連載>対人援助学マガジン No. 66

70の手習い・めいきんぐ

横書き都々逸

②

そだちと臨床研究会

川畑 隆

試運転をあとふたつ

貢献寿命

貢献寿命を耳にした時
尽きた人生があったものだから
途切れぬ命のことだと思った

亡くなった後も心に残り続ける
人の命に限りはなく
閉じた人生も区切られただけ

でも 貢献寿命を紐解くと
それは亡くなるまでのこと
尽くせる年月を数えていた

これまでどれほど注いだか
あとどれほど刻めるか
そう問い詰められたりして

いや 貢献寿命は緩くていい
寿命はあるよりないがいい
一人よがりの夢をみる

生きてるだけだと言われても

息が途切れたその後もずっと
静かに笑って貢献している (筆者)

「あなたの写真に また手を合わせ
わたしの心に コピペする」
「貢献寿命と せかされたなら
自分に貢献 していない」
「貢献寿命は 締め切りがない
まったく慌てる ことはない」

アーティスト

詩を書く人は詩人で
作詩家とは言わない
歌詞を書く人は作詞家で
詞人とは呼ばない

詩は人となりにもで及んで
詞はそこに並べられたコトバ
詩はポエムとも言うてもらえて
詞は他に呼びようがない

歌人は短歌を詠む人で
歌(詠)うのは歌手や詠み手
俳人は俳句を詠む人で
川柳を作るのは川柳作家

差異は自分の独自性を主張し
同時に格差も醸し出す
格差をなくそうとの呼びかけに
差異の感覚が静かに立ちこめる

急に増えたかアーティスト
芸術家と訳しさえしなければ
下剋上には無理があっても
抵抗勢力のひとつかもしれない (筆者)

「芸術家だと 呼ばれる人は
アーティストでも 似合ってる」

「みんなタレント テナントみたい
四文字は軽いし 借りやすい」
「わたしを誰だと 思ってるてか
あ・な・ただけでは 足りぬかい」

＊

「ホントの父じゃ ないんだホント
言えたらよかった そうだよね」

事件の被害者となった子どもの「発言」と「いきさつ」として切り取られ報道されたものを材料にしていますが、その報道されたものに私はこう反応しました。

相手の言葉の意味を理解して「そうだよね」と思うこともあれば、理解はまだ曖昧でも「そうだよね」と受けとめた後から、「そうだよね」と気づくこともあるんじゃないでしょうか。

「コメントしないと コメントしたら
ベストコメント ワイドショー」

取り上げられたその事件の背景への陳腐な憶測が飛び交い、ひとりのコメンテーターの居心地の悪さが画面ににじみます。そして言動一致のアンチ・コメント宣言…ワイドな意見でまさにワイドショー。私にとって、いやきっと多くの人たちにとって、「それぞコメントありがとう」でした。

社会的に生きている以上、自分の置かれている「立場」の認識は必要なのだと思いますが、そのことと「自分であること」とをどう両立させるか、その葛藤に鈍感でなかったのが新鮮でした。

＊ ＊

前号に「七・七・七・五に縛られる不自由じゃなくて自由を試してみたい」と書きましたが、字数に合わせる工夫が自由かどうか、言葉を選ぶ自由を実感しています。字数が自由だと最初に用いた言葉がそこに居座ってしまうのです。字数が合わず選ばざるを得なくて選んだ言葉は、やはり選んだ甲斐があるように思います。

『「そうだよね」と受けとめた後から、『「そうだよね」と気づく』のにも、「形から入る」メリットという似たところがあるかもしれません。

(了 2026.9)

いざ、本運転、すたあと

「よそはよそだと あきらめさせて
よそが得すりゃ 尻たたく」

2026年5月5日朝日新聞朝刊の読者欄に高校生が投稿していました。「『あの子は持っているのに…』とねだると『よそはよそ、うちはうち』と言って買ってくれないのに、テストの点が悪かったら『あの子の点数はよかったらしいけど…』と返ってくる。その矛盾を突くと『それとこれとは別の話』と片づけられる。『よそ』ではなく昨日の私と比べて」と訴えています。

ホント、そうです。この投稿は子どもの日の子から親への逆のプレゼントですが、こんなことを書けるようにまで成長したわが子に向けられる満たされた顔が、親から子への正のプレゼントになればいいなと思います。

「それがダメだと 切り捨てないで
これがいいよと 教えてる」

その「『よそ』ではなく昨日の私と比べて」と訴えた高校生、「これがいいよ」と言ってあげたらよかったのにと後悔ばかりの私たちに、いとも簡単に（ではないかもしれませんが）そう言えることの眩しさを感じさせます。

批判を願いや期待に変換できれば、コミュニケーションは変わるんだと思います、その努力の最初にはぎこちなさが伴うにしても、願いや期待を届けたい相手への信頼感はホントなのですから。